

## 審査の結果の要旨

課程博士論文 ピエール・クロソフスキーの作品における伝達概念と方法としてのド  
ドラマトゥルギー

論文提出者氏名 大森晋輔

本論文は、現代フランスの作家であり、思想家でもあるクロソフスキーの作品における伝達・疎通（コミュニケーション）の概念を究明することを目指しており、そのためにクロソフスキーが演劇的な方法の持つ大きな効力を活用した面をとくに詳細に解明しようとした論文である。

第一部では、クロソフスキーにおける伝達・疎通の概念を考察するうえで重要な「パトファニー」という考え方を提示し、論究している。この概念は、「テオファニー」（神々の顕現）という神学的な概念を下地としつつ、舞台上の伝達行為における送り手（神々、およびその役を演じる俳優）と受け手（人間たち、観客）との関わりのなかで生じる「パトスの顕われ」というかたちで発想されている。眼に見えない神々と人間たちとのあいだになんらかの伝達が可能になるのは、祭礼や儀礼によって昂揚した心的状態、パッションが流動するからである。それに類比した仕方  
で、クロソフスキーの見方では、人間同士の伝達の欲望（パトス）が交差する磁場である「パトファニー」が起こる可能性がありうるとされる。〈神聖なるもの〉のように知的な理解を超えているようななかには、意識的な思考活動による知的な（また合理的な）説明や解説や論述によっては十分には伝わらない。なにかしらパトス的なものの顕われを通してのみ、伝わる可能性があるだろう。

第二部では、以上の考察をもとに、クロソフスキーのニーチェ論に見られる伝達・疎通（コミュニケーション）の問題系が究明されている。ニーチェの〈永遠回帰〉の思想は、なによりもまずニーチェ自身が生きた体験であって、心的・思索的であると同時に身体的・生理的な恍惚・脱自性（エクスタシス）として経験されたなにかである。だが、こういう生きられた体験を思想・哲学的に表現するためには、人々がこれまで語ってきた言語（ランゲージ）に基づいて書き記すことに依拠するほかない。言語活動は、生きられた体験（それも、真に私へと現前するものとしては経験されなかった経験）をほんとうにリアルなものとして言い表すことができるだろうか。ニーチェは、こういう問題に突き当たるなかで、言語（記号的なものである言語）の働きに敏感になっていく。この世界は（神によって創造されたものではなく）よくわからない記号的なものとしてわれわれに読むこと、解釈することを求めている。それらの記号的なものは、実のところ流動状態にあり、けっして固定しておらず、いつも異なるものへと生成しつつある。しかし、われわれの語っている言語は、いつのまにか「日常的記号のコード」となっており、基本的に固定した意味作用を行ない、いつも同一なものを指し示す。絶えず異なるものへと生成しつつあるものを、つまり本来的には差異性の動きであって同一性の定まっていなものを、「コード」が定めている同一性の枠のうちにはめ込んでしまう。ニーチェは、原初的な流動状態の記号を「衝動の記号論」というかたちで理解し、語りがたいもの（生きられた体験のリアルな真実）を語るためには、言語（記号的なものである言語）を、「日常的記号のコード」から外して、原初的な流

動状態の記号へと復権させていかねばならないと考える。そのために、語りえぬものを、模擬的に、虚構的に、比喩的に語るという言語活動を実践していく。こういう模擬性、虚構性、比喩性を示唆する言葉が、シミュラークルという語である。クロソウスキーは、ニーチェの思想的な言語活動（書くこと）を、シミュラークルとしての言語実践と見ている。

第三部では、いま見たような「模擬的な」伝達・疎通のテーマが、クロソウスキー自身の創作においてどう扱われているのかを検討している。『歓待の掟』三部作のなかでは、身体的なもの（体験的に生きられるもの、知的理解の及ばないもの）と言語的なものとの関わり方が、「パトファーニー」的な伝達・疎通をめぐる、問われている。ひとりの人間が生きる経験のうちで、身体的な衝動に根ざした独自のものを、クロソウスキーは「ファンタスム」と呼ぶが、そういうファンタスムの特異性は、知的な理解のうちに入ろうとしないものであり、通常の言語活動においては気づかれず、抜け落ちる部分であって、ひとえに言語活動を転換することを通してのみ、すなわち模擬的に、虚構的に、比喩的に語るような言語活動へと移行していくなかでのみ、かろうじて暗示される可能性を持つことが考察されている。

第四部では、クロソウスキーによるウェルギリウス『アエネイス』の翻訳の持つ意味合いを検討している。クロソウスキーは、この翻訳作業のなかで、どこまで言語の実践は身体的なものに近づくことができるのか、自らの「シミュラークル」的な運動と化することによって、伝えがたい部分を伝えることに接近できるのかを、試みているといえる。そう本論文は考えている。

第五部では、クロソウスキーの絵画論において、その伝達・疎通の思想が、そのように変わり、また変わらないままに展開されているかを究明しようとする。絵画においては、制度化されているステレオ・タイプを逆手にとって、それを誇張したかたちで用いること、また文学表現においてよりもっと劇的なもの（スペクタクル）を活用することによって、伝えがたい部分の伝達を試みるのが、大きな特徴となっていると、本論文は指摘している。

本論文は、クロソウスキーの作品における伝達・疎通の概念を究明しようとしているが、その際にまず第一点として、大きな時代的、思想的背景を考慮に入れていることが評価できる。現代の文脈において伝達・疎通の問題を問うことは、必然的に伝えがたいものの伝達を問うことになる。本論文は、クロソウスキーが、ニーチェの〈永遠回帰〉の思想およびバタイユの「内的体験」（と呼ばれる「外」の経験、つまり主体＝自我の「外」の経験）という思想をよく咀嚼しつつ、キリスト教的な唯一神への信仰が揺らぐようになった近・現代世界においては、〈私＝主体〉の完全な同一性がもうありえず、問い直されるということ、そしてこのように〈私は考える〉の明証性を問い直すことは、身体的なもの（必ずしも意識されないままに生きられる衝動的、欲動的なもの）が黙したまま言おうとしていること、意識的な思考のうちに現れてこないものを読み取る点である点を、できる限り自らの伝達行為のうちに取り込んでいると指摘する。これは、優れた観点である。

さらに、第二点として、そのことは同時に、通念的な〈言語の体系と構造〉を疑うことにつながっている点を考えている。クロソウスキーの思想が目指すのは、「日常的記号のコード」から外れている部分、よく意識されない心の過程として生きられている部分を、それでも日々自分たちが用いている言語（およびその活動）を通して読み解き、表出し、伝えようとする点である。このように伝えがたいもの、語りがたいものを語ろうとするためには、言語（記号的なもので

ある言語)の用法、語り方を、「日常的記号のコード」にそのまま即して行なうのではなく、そういう「コード」から外れている仕方、いわば模範的、比喩的な仕方実践することが求められる。身体的なもの(ほとんど意識化されないままに生きられる衝動的、欲動的なもの)が黙したまま言おうとしていることを直接的に語ることは不可能なことであるが、しかしそれを模範するやり方、虚構的、比喩的に暗示するやり方で語ることであれば、かろうじて可能であるかもしれない。

本論文は、第三点として、クロソフスキーの文学作品、翻訳作品のうちに、以上の「シミュラクル」的な言語実践が見られることを、具体的な分析を通じて論証している。さらに、晩年のクロソフスキーの絵画作品、絵画論を検討し、その特徴を演劇的、スペクタクル的な伝達行為の探究とみなして考察している。これらの考察の基本構図は妥当である。本論文は、これまでのクロソフスキー研究の成果を着実に踏まえながら、クロソフスキーの思想・文学の最も重要な核心が「伝達しがたいものの伝達を問うことを通じて、シミュラクル的なコミュニケーションの可能性を探ること」であった点をよく解明していると言えよう。むしろ不十分なところはあり、たとえば第五部における絵画表現の伝達性が文学表現の伝達性とどのように異なるかの解明などはまだ改善すべき部分が大いにあるだろう。フランス語のテキストの翻訳に関しても、難解なテキストであるとはいえ、さらに手を加えるべきであると思われる。しかし、総体として本論文は、クロソフスキー研究に大きな貢献を果たしているのみならず、現代の思想・文学の問題系の一つであるコミュニケーションしえないもののコミュニケーションというテーマにもある寄与を果たしているという点で、審査員全員の合意を得た。よって、博士(学術)の学位を授与するにふさわしいと認定する。